



なつかしい見晴らしの丘

柳田国男も感動した

〜細山の七国峠と勝坂〜

環境庁が昭和五十九年に推進したアメニティ(快適)タウン計画で麻生区はそのモデル都市の一つに指定され、快適環境づくりを行う中で「見晴らしの丘麻生ビューポイント10」の事業が生まれ、区民の投票で十ヶ所が選ばれ、細山から二ヶ所選ばれた。一つは、現在、授産学園のある近くの七国峠、もう一つは天理教会近くの勝坂周辺だった。

千代ヶ丘小学校の隣の西久保緑地を登って行くと高台に「麻生ビューポイント10」と書かれた赤茶色の石の台の標識が建てられ「麻生見晴らしの丘」とあり、「その昔は相模(神奈川県)、武蔵(東京)、伊豆(静岡)、安房(千葉)、下総(千葉)、常陸(茨城)甲斐(山梨)の国々が見えたと言われています。」(川崎市)と記されている。七つの国が見晴らせたというので七国峠の名がある。昔は、東京湾に浮かぶ白帆が見えたらしい。

今でも、新宿あたりの高層ビル街が眺められ、香林寺の五重塔も眼下に眺められ、かつての面影を想像することが出来るが、今では、たくさんさんの家が林立し、都市化された風景が目につて驚かされる。

ビューポイントの二番目になっている勝坂周辺からは、麻生区を眼下に一望することが出来、大山、丹沢、富士の眺めも素晴らしいし、入り日の美しさには心が癒やされる。柳田国男さんはこの地に何回か立ち、江ノ島が見えたと、感動されていた。

細山にはまだこんな風景が残っている。一度は訪れて見たいなつかしい「見晴らしの丘」である。

絵と文 山田昌一(土筆)

からむし六十号の
ラインナップをご紹介します

- P1 麻生区の風物紹介
今号は六〇号を記念して顧問の山田土筆先生にお願いしました
- P2 本会顧問で昭和音大 下八川理事長に「新しい風」について力強いメッセージを頂きました。
- P3 麻生区長に北沢仁美さん、麻生市民館長に三枝正孝さんが就任されました。お二人から文化協会へのメッセージを頂きました。
- P4 かわさき市民芸術祭舞台部門が開催され好評でした。伊藤胡桃実行委員長が報告します。
- P5 今年も恒例のあさお古風七草粥の会が盛大に開催されました。今年にはカルタとりを実施し好評でした。
- P6 麻生区文化協会の平成二八年度総会が四月二六日に市民館で開催されました。菅野明さん、馬場身江子さん、本玉秀夫さんが受賞されました。
- P7 アカデミー部が主催する俳句大会・俳句講座・雑学教室について、本玉秀夫さんが報告します。
- P8 会員の活動のページです。
藤田正俊さんの切り絵展、松田洋子さんの川崎市美展特選受賞、池内英夫さんの句集出版を紹介します。

「音楽を通して、麻生区に新しい風を」

昭和音楽大学理事長 下八川 共祐



に携わる芸術家(国際的な人材を含めて)も住み着くことになった。しかも市民が関心を持ち芸術家が携わる芸術の領域は多様であり、音楽のみならず、演劇、美術、映画等に及んでいる。さらには多くの芸術団体が形成されてきた。

この地域が開発されたのは、それほど古いことではない。しかし開発当初から、地元の人々や行政、小田急をはじめとする民間開発者も含めて、この地域を「芸術のまち」にしたいという希望があったと聞いている。

そこに日本映画大学が来られ、私どもの昭和音楽大学が来て、アートセンターをはじめとする文化施設が建設され、こうした芸術文化拠点が数多く立地していくことで、面ととなつて広がり「芸術のまち」の基盤ができてきたといえよう。

開発されるにつれて、この地に多くの新住民の方々が移り住んでこられたが、幸いにも芸術に対する関心の高い方々が多く、また芸術そのもの

芸術に関心の高い市民や芸術家、芸術団体、多くの芸術文化拠点、多様な芸術が一体となつて、今日、麻生区の独自の芸術文化が開きつつあるといえよう。これをさらに発展させ、東京から自立し、横浜とも川崎とも異なる、独自の「麻生文化」を作つていくためには、さらに「新しい風」のうねりを作りあげていく必要がある。

それでは「新しい風」とは何か。今、私が考えていることの二つは、国際化であり、二つには、子どもから障害者、高齢者まで、あらゆる人々が生涯に亘つて芸術に親しむことができる環境づくりである。

第一「国際化」とは、この麻生区ので、広く世界の多くの芸術に接す

ることができ、またこの地の芸術家・愛好家たちが世界の各地で活躍できるといふことでもある。本学は、一九六九年の昭和音楽短期大学開学以来、こうした国際化を志向してきた。一九七六年国立ブレイメン芸術大学(当時は西ドイツ)音楽科との提携、一九八二年イタリア国立サンタ・チエチリア音楽院との交流、一九八九年ウイーン国立音楽大学との提携、さらに近年では、二〇〇九年中国瀋陽音楽学院との友好協定、二〇一三年タイチエラロンコン大学芸術学部との学術交流、二〇一五年には韓国ソウル市立大学および中国上海音楽学院との交流など、アジア諸国との交流を活発化させている。今後は、そうした国際化を大学だけにとどめず、麻生区の人々にできるだけ広く還元したいと考えている。

第二の「生涯に亘る芸術環境の形成」についても、本学は、かねてより「地域の音楽環境整備の翼」を担うべきだと考え、オーディションで選考された学生たちが麻生区の小中学校や高齢者施設などに出向いて音楽公演を行う「アーツ・イン・コミュニティ」という地域連携プログラム、六十歳以上のアマチュアを対象にした「おとなだけの音楽会」という企画、「オペラ歌手と童謡を歌う会」など、多くの試みを行ってきた。

また、本学には「音楽療法」の学科があり、障害者、高齢者に積極的に音楽に接する機会を提供している。さらには、本学の短期大学部には「音楽と社会」というコースを設け、社会人や高齢者の方々にも音楽教育を提供している(実際に高齢者の方々も在学している)。今後はそうした試みやコースをますます充実していきたいと考えている。

ほかに「新しい風」の課題は多い。例えば、伝統文化と新しい文化、プロとアマ、音楽と他の多様な芸術分野、こうしたものが互いに孤立せず、相互に刺激しあいながらコラボレーションをしていくといった諸課題も今後ますます考えられていくべきである。

ともあれ麻生区に芸術の「新しい風」を吹かせることは、突き詰めていけば、「芸術の力」の発信であろう。いつの時代でも平穏な生を送る人は少ない。人生常に坂があり谷がある。多くの人はその長い一生の間に、困難に

直面し、傷つき、悩み、苦しみ、悲しみ、挫折も絶望もすることさえある。そんな時に芸術作品に出会う。すぐれた芸術作品の多くは、作者がそうした様々な困難に直面しながらもそれらを克服しようとして作りあげた作品である。そんな作品に出会うことで、作品の持つ力に触れ、また自分と同じ悩み、苦しみに直面する作者に触れる。そのことを通じて自分自身の克服する力を生み出すとともに、同じ悩みを持つ人たちの「つながり」を確認できるのである。



それは自分自身「芸術の力」を得ることである。

昭和音楽大学が麻生区の人たちにそんな「新しい風」をますます提供できれば幸いである。

地域に根差した文化で地域交流を期待

川崎市麻生区長 北沢 仁美



四月二日付けで麻生区長に着任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

着任時はちょうど桜が満開となり、麻生川の桜まつりが盛大に開催され、川沿いには大勢の皆さんがお花見を楽しんでいらつしやいました。昭和五十七年七月の麻生区誕生

の時に保健所に配属されて以来、二度目の麻生区役所での仕事となりますが、緑豊かな自然と季節を感じる風景に囲まれていることを改めて実感いたしました。

麻生区は人口増加が続いており、十八万人まで増加すると予想されています。しかし高齢化率は他の区と比べて高く今後もし上昇していく見込みで、少子化、核家族化などの進展もあり、人々のつながりの希薄化など様々な地域課題も発生しています。一方で市民アンケートによりますと、麻生区は定住志向の割合が中原区に次いで二番目に高くなっています。

麻生区には多数の文化関係の地域資源が存在するという強みもあります。芸術・文化に関連する施設団体では昭和音楽大学、日本映画大学、川崎市アートセンター、劇団民芸などが集積しております。また、新百合ヶ丘駅周辺には九つのホールが立地し、芸術文化のまちづくりを推進する環境が充実しています。また、里山や都市農業などの豊かな自然も多く残り、区の花「ヤマ

ユリ」と区の木「禅寺丸柿」を活用し区をアピールする取組みも進めております。こうした地域資源を生かした文化活動が活発に行われることで、地域の活力の向上にもつながっていくと思われまます。

麻生区文化協会は二年前に創立三十周年を迎えられ、記念誌「からむし」は、古くからの風土に合った伝統文化などに関係してこられた方々による、分かりやすく、内容の深い素晴らしい編集となっていました。三十周年を契機に、伝統文化の継承と市民参加型の行事や取組みに新たな視点を通じて広く芸術文化を発信するとされています。

「あさお古風七草粥」は、地域の伝統的な風習を現代に蘇らせ、お正月の風物詩として定着し、ますます参加者も増え地域への愛着の醸成に大きく寄与していただいています。

また、市の主要施策として取組みが始まった地域包括ケアシステムでは、高齢者をはじめ、障害者や子ども、子育て中の方など全ての地域住民が「助けられる人」「助ける人」を明確に区別することなく各種の地域活動を通じて社会との繋がりを深めていくことが、住民一人ひとりが地域の中で、いきがいを持って暮らし続けていくことにつながることを期待されています。さらに、こうした活動を地域全体に広げていくことにより地域のコミュニティが活性化され、誰もが安心して暮らし続けることができる地域社会の構築を目指すものです。

麻生区文化協会が長年取組んでこられた地域に根差した芸術・文化活動はまさに地域の方々をつなぎ、交流することによって関係性を築く取組みになるものと思えます。区民がまことに愛着と誇りを持ち、こうした貴重な地域の資源を大切に育むと

文化芸術活動の活性化に役立つ市民館

麻生市民館館長 三枝 正孝



本年四月から麻生市民館長としてまいりました。よろしく申し上げます。三十五年

の役所人生で、地域の文化、芸術に関わる部署は初めてとなりますが、これまでの職務で得た経験や視点も生かしながら、地域の皆様のお役に立てるよう努力していきたくと思っております。

麻生区は異なる専門領域を持つ大学が複数立地し、市を代表する芸術関連施設が数多く存在し、これらを拠点とした芸術の

まちとしての取組みが盛んです。一方で、豊かな自然を背景に育まれた伝統文化も数多く残っています。私自身も二十年ほど前から麻生区に住んでいますが、すこし足を伸ばせば、徒歩圏内に里山や田畑など草花や鳥のさえずり等で四季を体感できる風景が残

り、地域の生活環境の中に歴史的遺産が違和感なく存在していると感じています。麻生区は先進的かつ本格的な文化的刺激に満

ともに、地域や大学などのさまざまな団体の皆様と手を取り合い、支え合うことで、未来に広がる、誰もが暮らしやすいまちづくりを進めてまいりますので、今後ともご理解とご協力をお願いいたします。

結びに麻生区文化協会のますますの発展と皆様のご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げます。

ちていながら、自然に囲まれた人間的な生活をも享受できる街と言えます。

さて、全国的な傾向として都市化や核家族化などの進展で地域のコミュニティが希薄になつたといわれて久しいですが、仲間を募って文化芸術活動をされている麻生区文化協会の皆様に限ってはそのような心配はあまりないかもしれません。

しかし、そのような活動に関わっていない方も多いのではないのでしょうか。残念ながら私も文化芸術関係の趣味は持ちあわせておりませんので、この範疇に含まれてしま

ます。市民館を利用しております皆様を見ますと、同じ趣味・価値観でつながった関係をきかけとして、ライフスタイルや様々な生

はお互いの悩みや課題も共有するようになるでしょうし、そこから解決策を見出せたり、さらにはグループで地域の課題の解決に取組むところまで発展するかもしれません。これはフェイストゥフェイスの関係だから生まれるもので、ネットを通じての関係ではなかなか難しいかもしれません。

この点で市民館は地域に根差した施設として、人々が気軽に集えてコミュニティのきっかけがつけられるような存在と言えます。ですから、こうした活動がより多くの方を取り込むような動きに広がればコミュニティの活性化が進み、皆で支えあつて、誰もが住みやすい街になっていくのではと思います。

市民館は日頃の活動の成果を発表する場となることで、多くの方に芸術文化の素晴らしさを伝える役目を担っていますが、より多くの方々に活動に誘導することにも役立つと思います。例えば、漠然と芸術文化活動に関心を持ちながらも今一歩活動にまで踏み出せないでいる人や、自分一人では何をどう始めたら良いかわからない人などを想定して、皆で活動することの楽しさや、気軽に参加できる様子を作品展示と併せてアピールできれば参加者の増加につながり、グループの活動の活性化も期待できるのではないのでしょうか。

これから市民館長として多くの事を学んでいかなければなりません。皆様の役割に立てるような市民館の姿を思い描きながら、文化芸術を始めとした市民活動、地域活動を支える役割を担っていけたらと思います。

第三十二回かわさき市民芸術祭を終えて

実行委員長 あさお洋舞ぐるーぷ 伊藤 胡桃

毎年早春に開かれるかわさき市民芸術祭が、今年第三十二回を迎え、舞台部門の洋舞・洋楽が二月二十八日(日)麻生市民館で開催されました。川崎市三浦副市長の祝

辞・川崎市総合文化団体連絡会鈴木理事長の言葉に始まり、川崎市各区の七文化協会と川崎市文協・文化会議と合わせて九団体の出演により、内容の濃いプログラムとなりました。

楽器演奏・独唱・クラシックバレエ・モダンダンスと、どれも観客の皆さんには楽しんでいただけたことと思います。

川崎市の地形から密接な意見交換の機会が少ないことなどで、一体感のある催しにして行く難しさがあります。北部の麻生は川崎方面から遠い会場でしたが、今回は地域誌に情報を載せていただいたことや晴天にも恵まれ、出演時間に合わせ入れ替わりながら延べ九百から千名位の観客にご覧いただけました。当日ケーブルテレビのカメラも入りましたが、残念なことにまだまだこの催しがあまり知られて

いない現状を今後の課題として感じました。

市民芸術祭の舞台部門会場は、和と洋各市民館ホールで交互に開催されるのですが、洋舞・洋楽の場合舞台の広さが必要となるので、それが可能な麻生の場合は担当区がすぐ回ってきます。担当区の役割も多くまた責任の重さもあり、催しの無事開催を祈りながらの半年間でした。

今年、ホールに念願のリノリウムが設置され、麻生区文化協会は約三十三分の時間をいただきました。あさお洋舞ぐるーぷからはモダン作品「水辺のカノン」とクラシック作品「海賊より「花園」」を上演しました。年齢は九歳から成人までゲスト出演を加え総勢四十五名が参加しました。

経験豊かなダンサーたちが織りなすオリジナルなモダン作品、そしてバレエ作品は五団体からの出演で、秋のオーディションから本番まで二十回という長い練習を重ねました。その成果は見て下さった観客の皆さまに伝わったことと思います。

合同作品の難しさを感じつつも終わってみれば、やはり良かったという達成感を感じます。文化協会の会長はじめ役員の方々、お力添えありがとうございました。

《出演団体》

〈水辺のカノン〉

・井上恵美子モダンダンススタジオ

〈花園〉

・菊池バレエ研究所

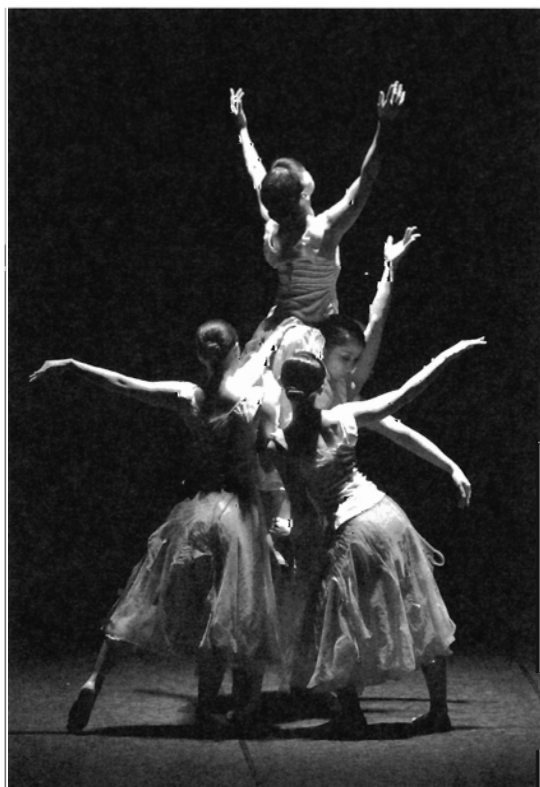
・バレエスタジオえるとえる

・吉原バレエ学園

・MIYA BALLET COMPANY

・胡桃バレエスタジオ(監修)

来年第三十三回は和となり、平成二十九年三月五日(日)川崎市教育文化会館で開催されます。



第十三回 あさお古風七草粥の会

総務 橋本周

あさおの正月のイベントと言えば、

一月七日の「古風七草粥」と市民から親しまれ新春の風物詩となった催事である。今年も晴天に恵まれ暖かな区役所広場で、千人からの人々が七草粥を賞味しながら無病息災を願い邪気を払ったひとときであった。

恒例となった広場では正月遊び、お囃子に獅子舞やおかめ、ひよっこ踊りなどが繰り広げられた。会場では「今年は書き初めがないが」「本格的な揮毫が見られず残念」などの声も多く聞かれた。今回は書家の笠原秋水氏の都合で来場者にお楽しみいただけなかったが、来年にまた期待するものである。



いよいよスタート

カルタ取り大いに楽しむ

今回、新たに参加者に楽しんでいただく「かわさきかるた」取りを行ったところ、これが大人気であった。会議用机二台のブロックを四つ設け、二ブロックに二組のかかるたを散らし、菅原会長自ら読み手となって始めると、会場は老若男女が歓声を上げ夢中で興じる。その様子は見る側もドキドキわくわくだった。参加者にはお菓子などお土産が配られ、皆さん満足そうな笑顔で、新年早々、笑う門には福来るであった。

「かわさきかるた」ってご存知？

「かわさきかるた」は、平成十六年に市政八十周年を記念して制作された郷土かるたで、四十四枚のいろはかるたには、川崎の素晴らしい自然や歴史、伝統芸能、ゆかりの人々が叙情豊かに描かれている。

読札は公募で選定された作品であり、絵札は市内在住の画家の方々によって描かれた作品である。



七草畑



あわただしく粥の提供

「古風七草粥」の裏側を

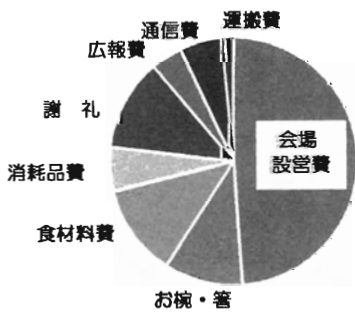
紹介しましょう

予算的仕組みについて
ところで、昨年までの「からむし」では、七草摘みから当日までの仕込みや段取りを紹介してきた。今回は、なぜ無料で提供できるのか予算などの仕組みについて紹介したい。

当初は、来場者からお粥代を百円いただいていたが、その後、平成十五年度から区の「ふるさとあさお再発見事業」の一つとして、麻生区文化協会に委託事業としておろされた。当時の区長や杉本会長の尽力によるものである。

予算化されたことで安定した事業展開が図られている訳で、因に三十二万八千円の予算で契約を交わしての実施である。若干の赤字は文化協会の予算から補填している。費用内訳は円グラフに示す通り、会場設営費(業者)が、約五十%と予算の大半を占めている。食材料・食器リユースなどは10%前後といった状況である。

(費用内訳)



	費用
会場設営費	155,600
お椀・箸	32,488
食材料費	38,133
消耗品費	18,478
謝礼	38,000
広報費	13,223
通信費	17,348
運搬費	4,730
合計	318,000

お粥を無料でいただくのは…

募金活動で社会に還元しよう!

前述のように委託料により賄うことで、粥の提供を無料にしたところ「ただで食べるのは心苦しい」「少しでも募金をしたら」との声に京会長時代の役員会で募金箱の設置を決め毎年実施している。当初はユニセフへ寄付していたが、平成二十三年の東日本大震災を機に読売新聞「光と愛の事業団」のことも支援基金に寄付金として送金している。

今年の募金額	61,624円
使途明細:	
寄付金	55,760円
送金手数料	864円
七草畑維持費(業者)	5,000円

七草粥を通し皆さんのあたたかな募金で社会貢献ができています。は誠にありがたいことです。



募金する親子

麻生区文化協会平成二十八年年度総会

平成二十八年四月十六日 麻生市民館大会議室

菅原会長挨拶

三十周年記念事業のキャッチフレーズ「新しい風と創造」の具体化を進めた。今年度は、あさお古風七草粥の会で「かわさきかるた」のカルタとりを実施、アルテリツカ新ゆり美術展で麻生高校の生徒さんの作品展示、雑学教室で麻生区ゆかりの二人の画家岡本太郎と中村正義を取り上げるなど「発想の転換」をもつて活動を進めている。



菅原敬子会長

表彰

長年にわたって麻生区文化協会運営委員役員として本会の文化活動に尽力された菅野明さん(美術工芸部)と馬場身江子さん(アカデミー部)が川崎市文化祭奨励賞を受賞しました。



菅野明さん



馬場身江子さん

アカデミー部副部長 俳句大会実行委員長、市民館生涯教育相談ボランティアとして麻生区の文化振興に尽力された本玉秀夫さんが麻生区文化振興賞を受賞しました。



本玉秀夫さん

来賓挨拶

新しく麻生区長に就任された北沢仁美さんは、人に潤いと喜びを与え、交流を創成していく文化協会の活動は大変意義深いと述べ、心豊かな地域文化を育てたいと述べました。



北沢仁美区長

また、新しく麻生市民館長に就任された三枝正孝さんは、市民館を拠点とした文化協会活動の貢献を評価しました。また、平成二十九年年度に予定されている文化センターの大改修への理解を求めました。



三枝正孝麻生市民館長

川崎市総合文化団体連絡会(略称総文連)の新しい理事長福嶋加代子さんは、麻生区の文化活動のレベルの高さをたたえ、引き続き総文連の活動への協力をお願いされました。



福嶋加代子総文連理事長

議事

議長として、池之上輝夫さんが選出され、議事が進められました。

〈平成二十七年事業報告〉

総会議案書に掲載された事業報告にそつて、平成二十七年年度に麻生区文

化協会が行ったすべての事業について総務および各部から報告されました。

本部として行った事業は、あさお古風七草粥の会、夏休み親子教室、アルテリツカ新ゆり美術展です。七草粥は二〇〇食提供されました。親子教室は十七教室が開設され、三五九名の子どもたちが参加しました。新ゆり美術展には、四三七名の参観者がありました。

事業報告の後半では、各部会の部長またはその代理から、文化祭をはじめとする活動が報告されました。

舞台芸能部からは、麻生フィル、洋舞、邦舞邦楽、吟舞吟詠の文化祭の報告および、麻生市民館で開催したかわさき市民芸術祭舞台部門の洋舞公演について報告されました。アカデミー部からは、俳句講座、俳句大会、雑学教室について報告されました。(詳細は次ページをご参照ください)

美術工芸部からは舞台衣装の女優さんを描くデッサン会、文化祭美術工芸展、アルテリツカ新ゆり美術展の報告のほか、アートガーデンかわさきで開催された川崎市民芸術祭美術部門の報告がありました。

文化サロン部からは文化祭で行った文化講演会「ベテルブルグ」モスクワ音楽二都物語」についての報告がありました。事業報告は拍手で承認されました。

〈平成二十七年会計報告〉

総会議案書に示された一般会計および特別会計の決算報告について会計か

ら報告されました。

一般会計について、収入の部では、会費、総文連・麻生区地域振興課からの補助金、および、事業収入からなるが、会費収入の大幅減および事業収入の大幅減のため、予算より約二十万円減になったこと、支出面では、会議費をはじめ、各部の節約によつて収入減をカバーし、前年度よりは少ないものの二十九万円の繰越をできたことが報告されました。特別会計について、文化振興基金と周年事業積立金の報告がありました。

以上の決算報告につき、監事から適正であるとの監査結果が報告され、会計報告は拍手で承認されました。

役員選考委員会報告

麻生区文化協会規約第九条に基づき平成二十八・二十九年度の役員を選考が行われ、以下の候補者が選考されたことが報告され拍手で承認されました。

新役員

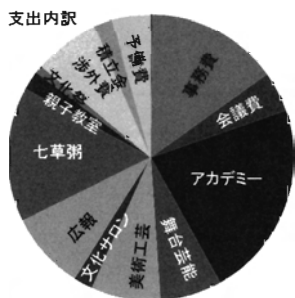
- 会長 菅原敬子
- 副会長 山室茂樹
- 会計 関森田鶴子
- 総務 横川博行
- 監事 伊藤胡桃
- 伊藤志津子
- 横須賀朝子
- 吉田 功
- 橋本 周
- 佐藤勝昭

〈平成二十八年度事業計画〉

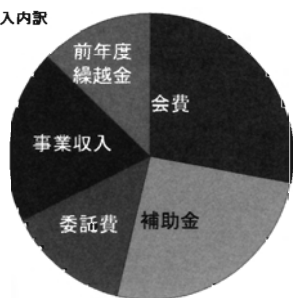
総会議案書に掲載された事業計画(案)にそつて、平成二十八年度に麻生区文化協会が行う事業案について総務から報告されました。基本的には二十七年年度を踏襲しますが、文化祭での市民館全館確保は必ず必要最小限とし、一般に開放すること及び、これまで三月と四月に二回開いていた運営委員会を一回にすることが提案され、事業計画は拍手で承認されました。

〈平成二十八年度予算〉

総会議案書に示された総額三二八万八、六〇五円の一般会計予算案が提案され、拍手で承認されました。



〈28年度予算の収入と支出の内訳〉



(絵と文 佐藤勝昭)

平成二十七年年度

第二十七回 麻生区文化協会俳句大会 (十一月一日)

実行委員長 本玉秀夫

一般の部

入選句

川崎市長賞

折鶴の声なき祈り原爆忌

麻生区 本玉秀夫

川崎市議会議長賞

文化の日間口の狭き骨董屋

麻生区 関森 田鶴子

川崎市教育委員会賞

花火果て星座音なく煌めけり

高津区 村田 雅松

麻生区長賞

婦省子の靴に吾が足乗せてみる

麻生区 馬場 身江子

麻生市民館長賞

青春のかけら見つけし曝書かな

町田市 谷 文香

川崎市総合文化団体連絡会理事賞

終戦忌曲がりし背なを伸ばしけり

麻生区 橋本 周

川崎市観光協会会長賞

パラオより還りし霊に新茶汲む

麻生区 都留 嘉男

麻生観光協会会長賞

流星になりてわたつみ間に消ゆ

麻生区 深松 サダ

麻生区文化協会会長賞

夕立なか声まで濡れて戻りけり

麻生区 池内 英夫

優秀賞

廃校の門を囁んでる赤とんぼ

笠原 秋水

湧く雲の移りゆく影蕎麦の花

佐伯 竹風

黙祷のしじまに遠き蟬時雨

本玉 秀夫

助け合ふ家族のありて敬老日

小原 万津枝

翳す手の灯影に揺れて風の盆

水野 盛雄

絹葉を摘む小鉢の重さかな

二見 秀太郎

一円玉泉の底へゆく重さ

山下 升子

雨上り山ごと迫る蟬の声

梅野 威彦

シヨベルカードつかと構へ盆休み

小原 万津枝

下萌に杖つく一步歩かな

千坂 禮子

ロボットと会話の時代夕端居

山室 みゆき

爽やかや少女にノベル平和賞

石田 厚生

墨の香に落ち着く写経竹の秋

有賀 元子

鳴き尽きて蟬の舞ひ落つ能舞台

本玉 秀夫

一輪を活けて書齋の菊日和

池内 英夫

補聴器を切りて聴き入る蟬しぐれ

市塚 茂二郎

松手入庭師思案の空録

藤森 成雄

母の愚痴聞くと孝養夕端居

吉沢 篁村

目こぼしの野菜の太る残暑かな

笠原 喜香

抜けるほど碧き空あり百日紅

北條 鈴子

隠れる木まだある里の盆踊

吉田 功

ふるさとや戸口まで寄す稲の波

川又 要子

しんがりに杖曳く歩幅濃山吹

斉藤 さのこ

薬臭を消す退院の髪洗ふ

関根 桃風

席題「目」または「岸」の詠み込み

上位十句

控え目に生きたる幸せとろろ汁

池内 英夫

秋深し別れの手話の目に涙

本玉 秀夫

対岸の灯は国後か星月夜

堀内 よし彦

笑ふ目を大きく描かれ敬老日

鈴木 ゆたか

目の上の秋の蚊払ふ閻魔堂

有賀 元子

目を閉じて名曲を聞く夜半の月

星野 有智子

秋うらら猫の目と合ふ竹の寺

馬場 身江子

秋刀魚の目見開く奥に海の青

町田 民夫

沖待ちの船を遠目に秋惜む

橋本 周

心地よき目覚めに感謝菊枕

関根 桃風

「小学生の部」(五年生)

優秀賞

ひまわりの下はほくらのみつきち

百合丘小学校 高橋 龍生

手の中でアユがあはれる夏休み

千代ヶ丘小学校 鎌田 正枝

ばあちゃんにほめられうれし夏休み

栗木台小学校 大山 天康

そでぬれて金魚をすくった夏祭り

栗木台小学校 眞嶋 風花

バスの戸開き祖母の笑顔と蝉の声

千代ヶ丘小学校 後藤 詩子

息とめて線香花火パチパチと

栗木台小学校 圓崎 大和

蝉しぐれ少なき命でつくりだす

百合丘小学校 寶諸 歩唯

里帰り家族そろって花火見る

片平小学校 長井 優美

最後までせんこう花火がばった

片平小学校 井上 歩美

鳴りひびくふるさとの音いい花火

麻生小学校 長谷川 愛

平成二十七年年度「俳句講座」

八月二十五日(火)

講師 齊田 仁

現代俳句協会会員

俳誌「麦」同人

應風代表

演題「国定忠次と小林一茶」

九月一日(火)

講師 松本 悦昭

高知工業高専名誉教授

俳入協会会員

俳誌「ささなみ」同人

演題「歴史を歩き、句を作り」

九月八日(火)

講師 千葉 茂樹

日本映画大学特任教授

シナリオ作家映画監督

「きたこち」百合句会会員

演題「命を守る勇氣

マザーテレサに学ぶ」

平成二十七年年度 雑学教室 「岡本太郎と中村正義」

講師 岡本太郎美術館館長 北條 秀衛 先生

開催日 平成二十八年三月五日(土)

アカデミー部では、雑学教室の実施に当たつて、菅原会長が二十七年総会で示された「あたらしい風と創造」の精神を具現するものを選ぶべきと考え、検討した結果、岡本太郎美術館長の北條秀衛さんに標記タイトルで講演をお願いしました。北條さんは川崎ゆかりの二人の天才芸術家である岡本太郎と中村正義の生涯と芸術活動について、エピソードを交えながらわかりやすく解説されました。太郎は、独学で絵画の技を習得し渡仏、ピカソに影響を受けます。万博の太陽の塔、水爆実験を告発する「明日の神話」など多数の前衛的な作品を産み出し八十四才の夭折を全うしました。一方、正義は美術学校を病氣中退、日本画壇の重鎮・中村岳陵の画塾に入門し、二十二歳で日展に初入選し三十六才で審査員になります。五百点におよぶ多数の自画像、赤い服の女など優れた作品を創造しましたが、病弱で五十二才の短い生涯を閉じました。二人とも、芸術に真摯で、太郎は二十

年属した二科展と袂を分かち、一方、正義は恩師との確執から、二回も特選になつた日展を退会したということです。正義は既成画壇に対向して東京展を立ち上げます。太郎は全作品を川崎市に寄付(時価総額三百六十億円とか)、市は岡本太郎美術館を枳形山に建設しました。一方、正義の作品は、娘さんが所蔵し、自宅を中村正義美術館として展示しております。娘さんの著書「父をめぐる旅」は映画化されました。

作品のスライドを示しながらの熱演に、二時間があっという間に過ぎました。(アカデミー部 本玉秀夫)



会員の活躍

松田洋子さん

川崎市美術展 特選 「森の音(木霊)」

今年度の川崎市美術展で平面部門に出展した松田さんの作品が特選になった。平成二十三年にも松田さんは作品名「森の帳」でやはり特選を受賞しており、今回で二度目の特選受賞となる。今回の作品は詩集「平面の森」に収められた作者自身の詩である「森への入り口」からイメージが生まれたそう。松田さんは森と文様とりわけ「唐草」に魅せられて創作の可能性を探っているという。この展覧会の審査委員は次のように述べている。

特選となった松田洋子「森の音(木霊)」は、シメトリカルな空間のなかに、確かな表現と造形により重奏する世界を表出し、色彩では特にグリーンによる階調が散華のように美しい。

藤田正俊さんの切り絵展

東海道川崎宿交流館の企画展示室で「川崎の名所百景」と題して「藤田正俊切り絵展」が二月九日(火)から三月二十一日(月)まで四十一日間にわたって行われた。

今年でも、藤田さんの「切り絵展」は川崎市民ミュージアム他いろいろな展示場で行われてきており、川崎の様々な場所を温かみのある切り絵で紹介している展覧会は好評であった。

藤田さんは川崎以外にも切り絵のモチーフにしているところはたくさんあるが、今までに川崎だけでも二五〇点以上の作品を制作しているという。今回の「切り絵展」ではそのうちの四十数点が展示された。切り絵で紹介された場所の中で行ったことのない所は、是非行ってみたいと思わせてくれる作品ばかりであった。



(岩田記)

池内英夫さん

句集「禪寺丸柿」

(文學の森社)上梓

柿たわわ熟れて柿生の禪寺丸梅輪空の深みにしづもりぬ

昨年十一月上梓された池内英夫さんの第二句集は、第二句集の「七国峠」から十年の間を置いている。この間氏は俳句結社「さざなみ」の同人会長や代表を務め、俳誌「さざなみ」は創刊五十周年を迎えた。

生まれは香川県高松市であるが、現在の住居である麻生の地の名産の禪寺丸柿を句集名にした。

文頭に紹介したように、やさしい言葉を使いながら、読むほどこにしみじみとした感動が伝わる素晴らしい句が納められている。

第一句集になっている七国峠に立ち、今号の表紙に山田土筆氏も書かれているが、柳田国男のように感激し、白秋のように禪寺丸柿を讃え、句作を楽しまれたのであろう。

優しくて、あたたかい句は、地元の俳句愛好家の間でも好評である。



(関森記)

文化協会のこれから

■デッサン会のご案内

恒例の「民藝の女優さんを描く」デッサン会は、六月十二日(日)午後二時〜四時に麻生市民館大会議室で開催されます。申し込みはがきに住所氏名年齢記載の上、左記あてお送りください。

〒二五〇〇〇四

麻生区万福寺一五・二麻生市民館気付

麻生区文化協会デッサン会係

(定員五〇名申込順)



■これからの行事

- ・夏休み親子教室(七月〜八月)
- ・俳句講座
- ・八月三十日(火)、九月十三日(火)
- ・麻生区文化祭
- ・十月二十三日(日)
- ・麻生フェイル ホール
- ・俳句大会 大会議室
- ・十月二十七日(木)
- ・十一月三日(木・祝)
- ・十一月五日(土)
- ・邦舞邦楽 ホール
- ・文化サロン 大会議室
- ・十一月六日(日)
- ・洋舞 ホール
- ・吟舞吟詠 大会議室
- ・あさお古風七草粥の会
- ・一月七日(土)
- ・麻生区役所前広場

編集後記

▼「からむし」六十号をお届けします。例年三月に発行していましたが、今年から五月発行となりましたので、総会の記録を掲載することができました。会長、受賞者、来賓を写真ではなく、イラストで紹介してみました。

▼本会の活動が、皆様に納めて頂いた会費に加え、総文連からの補助金、麻生区からの委託料と事業収入から成り立つこと、および、このお金がどう使われているかを、円グラフで表すことも試みて見ました。

▼会員の高齢化に伴って、個人会員数が大幅減になり、決算報告はやりくりの苦労がにじみ出たものになりました。総会では、会場からねぎらいのお言葉頂きました。入会のお誘いのお声をかけをお願いします。(佐藤)

編集委員

岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本周、横須賀朝子

麻生区文化協会会報

からむし 第六十号
平成二十八年五月一日発行
発行人 麻生区文化協会
会長 菅原敬子

編集 麻生区文化協会広報部
川崎市麻生区万福寺一五一一二
麻生文化センター内

印刷 (株) エリアブレイン
電話 〇四四一九五二一一三〇〇